『彼氏の周りにいたら頼りになる女』

大きなガラス窓から、少し眩しいくらいの光が入ってくる。
外で浴びるには溶けてしまうのではと思うくらい熱い光だけれど、この大学のカフェ内はエアコンの冷房が良く行き届いているから程よく気持ちがいい。
窓際の２人席。私は手元に置かれたアイスティーをストローで１口飲むと、目の前に座る男へニコリと笑みを浮かべながら話しかけた。
「それで？　相談なんて、急にどうしたの？　けんちゃん」
アイスコーヒーを飲んでいた『けんちゃん』こと『健』は、私へチラリと視線を向けると、アイスコーヒーのグラスをゆっくりとテーブルに置いた。
「いや、実はさ……ちょっと今、彼女とぎくしゃくしちゃってて」
「え〜！　うそぉ〜！　えっ、えっ？　なんでぇ？」
「……昨日、久々にバイト先まで会いに行ったら……なんか、怒らせちゃったっぽい……」
そうしてけんちゃんは、細かく詳細の説明を始める。
つい先日、うちの大学では体育祭が行われていた。
けんちゃんは先生からの指名でその体育祭の実行委員を任されており、ここ最近はサークル活動やバイトに加え、準備やら話し合いやらで多忙を極めていたと言う。
そのせいで彼女さんに会うどころか、連絡すらもできていなかったようだ。
けれどその体育祭も無事に終わり、久々に時間ができたため、彼女さんの退勤時間に合わせてバイト先へサプライズで会いに行った。
「そしたら怒られた。忙しくて会えてなかったし、連絡もできてなかったから機嫌損ねちゃったのかなって」
そう言うけんちゃんの顔は、いつも通りクールな表情を保っているが、手元は落ち着きがなく、ストローでアイスコーヒーを混ぜ続けている。
「そっかぁ〜……大変だったね、けんちゃん」
私は困ったように微笑み、心底相手を労わっているかのような声を出して見せた。
そんな私にけんちゃんが視線を向けたのを確認し、可愛子ぶって両手で頬杖をつく。
「確かにけんちゃん、ここ最近忙しそうにしてたもんね〜。毎日のように体育祭の準備はあったし、サークルの活動は相変わらずだし、しかもけんちゃんはバイトもしてるんだもんね〜！　うんうんうん――」

――バァンッ！

「んなこと知ったこっちゃねぇよ」
机を強く叩いた私の様子に、けんちゃんは居た堪れなさそうに目線を逸らした。
「いや、忙しかったっていうのはわかるよ？　でもさぁ？！　だからって『忙しかったから』っていうのを言い訳にするなぁ？！　忙しかろうがなんだろうが、お前が彼女とのコミュニケーションを怠らなければ拗れたりしねぇんだよ！」
「いやでも、マジで時間なくて――」
「メール送ることもできないくらい１分１秒も時間なかったんか？　あぁ？」
「ごもっともです……」
「先に言っとくけど、私は『えぇ〜！　けんちゃんは悪くないよぉ〜！　忙しかったんだからしょうがないよね〜！』みたいな彼氏の周りに居たら嫌な女のテンプレみたいなこと言って庇ったりしないからぁ」
ドカッとチェアの背凭れに勢いよく体を預けて足を組み、私はアイスティーをゴクゴクと飲む。
一方的に私に詰められたけんちゃんは、気まずさからか先ほどよりも 30 度くらい顔を俯かせていた。
「……謝罪はした」
「当たり前だわ。謝罪ないとかありえないから逆に報告いらない。てか報告することで『俺ちゃんと謝れる男です』アピールしてるっぽくてウザい」

私のチクチクとした言葉が効いているのか、もはやそれを気にしている余裕も無くなってきたのか、けんちゃんは溜息を吐くとテーブルに肘をついて頭を抱え始める。
「まじでどうしたもんかなぁ。心臓バクバクしてきた死にそう」
「それ前にやらかした時も言ってた。けんちゃんほんと学ばないねダッサ」
「うるせぇ俺が一番わかってる」
ゴンッという音を立てて、けんちゃんがテーブルに顔を突っ伏すと、アイスコーヒーの氷がカランと音を立てた。
すると同時に、突っ伏したけんちゃんの横に置かれたスマホが震え、画面にパッと色が付く。
どうやら何かの通知を知らせるバイブが鳴ったようだ。
色が付いたロック画面には１つの通知と、例の彼女さんが笑って映っている壁紙。
その画面を見て、私はふと浮かんだ疑問をけんちゃんへ投げかけた。
「ってかさ、別に彼女さん『何よりも自分を一番に優先しなきゃやだ！』っていうメンヘラじゃないでしょ？　ちゃんと説明すればわかってくれるタイプの子じゃん。どうして連絡しなかったのかっていう説明はちゃんとしたんでしょ？　そこからなんで拗れたの？」
「……」

――ガタッ！

突然、先ほどまで力なく机に突っ伏していたけんちゃんが勢いよく立ち上がった。
「えなに。　急にキモ。　どしたの」
「……」
「もしかして、まだ説明してないの……？」
「……」
「クソ野郎がよォ……」
音のない肯定を聞いて、今度は私が頭を抱えることになった。
机に両手をついて俯くけんちゃんの目は、動揺でキョロキョロと揺れ、額には少し汗が滲んでいるように見える。
「おッ前連絡も説明もなにも無しに突然会わなくなったら不安にもなるだろうが！　しかも？！久しぶりに会えたと思ったら？！　連絡も寄こさなかった彼氏は何事もなかったかのような顔してるし？！　その上説明もなにもない！　そりゃ彼女さんがムカついて当たり前だわ！」
「いやまじ俺もそう思う……」
「なんでそんな大事な部分忘れんの？！　は？！　じゃあなに？！　理由もわからないのに彼女さんが怒ったからとりあえず謝ったわけ？！」
「うん……」
「お前サイッテーだわマジで！！！！」
未だに俯いたままのけんちゃんをひっぱたき、とにかく彼女さんへ連絡するように言いつける。
ひっぱたかれてハッとしたのか、けんちゃんはチェアに座ることも忘れて彼女さんへ連絡をし始めた。
「会いに行くなら謝罪の品の１つや２つ持っていきなよ」
「そりゃもちろん……！　ちょ、今から行ってくるわ」
「え、今から？　もう返信来たの？」
「いやまだ来てないけどっ、この時間ならもう多分家にいるはずだし、居ても立ってもいられないから……！」
そう言いながら荷物をまとめ始めるけんちゃんを、私は呆れた顔で眺める。
「こんな彼氏を持って彼女さんも大変だわ。なんか可哀そうになってきた」
「うるせぇうるせぇ、じゃ！」
「あ！　ちゃんとコーヒー代置いてってよ」
走り出そうとしたけんちゃんは苦い顔をして私を見るが、私は知らん顔してアイスティーを飲む。
相談に乗ってあげたんだから、本当ならそれ相応のお礼を要求したいくらいなのに、それをし

ないだけ私の優しさに感謝してほしい。
　けんちゃんは背負った鞄を降ろすと、財布を取り出して漁り始めた。
「あんまり泣かせるなら、彼女さん私がもらっちゃうから」
「やらねぇよ」
「じゃあ別れたら教えて。ソッコーで彼女さん口説きに行くから」
「別れねぇよ。ってかお前彼氏いるだろ」
「彼氏はいるけど、彼女はいないから」
「ドヤ顔で言うことじゃねぇ」
　グッと立てた私の親指を叩き、けんちゃんは少し多めのコーヒー代を私の前に置いた。
「これでなんか好きなもんでも食って！　じゃ！」
　早口でそう言うと、けんちゃんは走ってその場を去って行った。
　その後ろ姿を見送り、目の前に置かれた代金へ視線を向けると、口角が自然と上がっていく。
「さすがけんちゃんわかってるじゃん」
　その気遣いを彼女さんにももっとしてあげなよ。と心の中でアドバイスをしながら、私はルンルンでメニューを開いた。